

関連事業

◆美術講座

フランス近代美術の魅力
アカデミズムからエコール・ド・パリへ

出品作品の解説をまじえながら、フランス近代美術の流れをわかりやすくお話しします。

日時 7/28(土)、8/4(土) 各日午後2～3時
講師 当館学芸員
会場 当館講堂(聴講無料)

◆展覧会解説

30分でわかる!見どころ解説

日時 7/14(土)、8/25(土)
各日午後2時～(30分)
講師 当館学芸員
会場 当館講堂(聴講無料)

◆ワークシート

会場には鑑賞のツボがわかるクイズ形式のワークシートもあります!

◆ミュージアム・コンサート

ヴァイオリンによる優雅な音色をお楽しみください。



日時 7/21(土)
午後2時～(30分)
出演 大平まゆみ
(札幌交響楽団コンサートマスター)
会場 当館ロビー(無料)

撮影:佐藤雅英

第2展示室のごあんない

姿/ Figure

一かたちの思惑

4月26日(木)～11月7日(木)

休館日

7/16、11/6を除く月曜日(ただし祝日は開館し、翌火曜日休館)、7/3(火)～11(水)

コレクションの中から人物、身体をモチーフにした彫刻や絵画を紹介します。

舟越桂(夜は夜に)2003年 北海道立旭川美術館蔵



交通のご案内

- 徒歩 JR旭川駅から20分。
- バス JR旭川駅北側の1条通の14番バス停〔1条8丁目〕から3・13・23・24・33・35番のバスに乗車。最寄りのバス停は〔4条4丁目〕(3・33・35番)、徒歩5分。または〔8条西1丁目〕(13・23・24番)、徒歩3分。またバス停〔常盤公園前〕を経由するバスもご利用いただけます。(徒歩7分)
- タクシー JR旭川駅から10分、800円程度。
- 駐車場 常盤公園駐車場(無料/午前9時～午後5時)をご利用いただけますが台数に限りがあります。

北海道立旭川美術館

Hokkaido Asahikawa Museum of Art
〒070-0044 旭川市常盤公園内
TEL:0166-26-2577
http://www.dokyoji.pref.hokkaido.lg.jp/hk/abj/top.htm
https://twitter.com/Asahikawa_Art

ユニマットコレクション

フランス近代絵画と珠玉のラリック展

～やすらぎの美を求めて～

19世紀半ばから20世紀初めのフランスの美術界では、伝統的な価値観と革新的な美意識のせめぎ合いのなかで次々と新しい美の潮流が生まれました。当時の主流は、神話や宗教、歴史を題材に伝統的な美を追究した美術アカデミーの画家たち。この流れに反発して誕生したのが、パリ郊外の農村風景を描くバルビゾン派や、ありのままの社会の姿に目を向けた写実主義、太陽の移ろいで変化する自然の色彩をとらえようとした印象主義の画家たちなどでした。その後、社会の近代化が進むにつれてより独創性豊かな表現へと向い、強烈な色彩を用いたフォービスムの画家なども登場。芸術の都パリにはさまざまな国から芸術家たちが集り、やがてエコール・ド・パリと呼ばれるようになりました。

本展では、こうした時代を彩った画家たちの作品を紹介するとともに、20世紀初めのアール・デコを代表する工芸家、ルネ・ラリックのガラス作品もあわせて展示。ダヴィッド、ドラクロワ、ミレー、コロロ、クールベ、ルノワール、ユトリロ、モディリアーニ、藤田嗣治(レオナルド・フジタ)等々、47作家96点を通してフランス近代美術の精華をお楽しみいただけます。

出品作品はすべてオフィスコーヒーや介護、リゾートなど幅広く事業を展開しているユニマットグループの所蔵。本展は同社のコレクションを一挙に公開する全国初の巡回展でもあります。ぜひこの機会に知られざるコレクションの数々をご覧ください。



アール・デコの幻想ときらめき

ラリックは宝飾デザイナーから転身したガラス作家。優雅でリズミカルな装飾様式を確立し、アール・デコの寵児として活躍した。ラリックの開発したオバルセントガラスは、光に応じて色調が変化することから、とりわけ人気を博した。右上作品:ルネ・ラリック「蓋物「ウブ」」(部分)1921年

ルネ・ラリック
〈香水瓶「アンフィトリテ(海の女神)」〉1920年

マグダラのマリアは、
画家たちのインスピレーションの源であった。

イタリアの古典絵画の影響を受けたエンネルは、風景画や裸婦像を得意とした。とりわけ、戸外を背景にした裸婦像は人気を博し、繰り返し描いた。ここでは聖女マグダラのマリアを、暗い岩壁にもたれかかり瞑想にふける若き美女として表わしている。



ジャン=ジャック・エンネル
〈マグダラのマリア〉



モーリス・ユトリロ
〈バニューの教会〉1925年

パリの詩情を描く

ユトリロは生涯にわたりパリの街を描き続けたエコール・ド・パリの画家。もともとは、アルコール依存症の治療の一環で絵を描きはじめたが、やがて高く評価されるようになった。教会はユトリロが好んで描いたモチーフ。彼の絵の多くはパリの絵葉書を元になっているが、これもその一つと考えられる。

最良のアトリエは自然のなかにあった

古典的な絵画を学んだコロロは、パリ郊外の森やイタリアの風景、人物などを描いた画家。銀灰色の霧(もや)に包まれたような繊細な色調や抒情的な作風が、当時から人気を集めた。フランス北部の小村の何気ない風景を描いたこの作品にも、そうした特徴が見られる。



ジャン=バティスト・カミーユ・コロロ
〈ジョイコットの想い出〉(1865～1870年)



ピエール=オーギュスト・ルノワール
〈母子像(アリーヌと息子ピエール)〉1886年

最愛の妻とはじめての子

明るく輝くような色彩とやわらかな筆致で女性や風景を描いたルノワールは、印象主義の画家。後年は印象主義と古典様式を融合した独自の豊富な作風を完成させた。ふくよかではばり色の頬をもつアリーヌは、ルノワールの理想の女性。創作意欲をかきたてるミューズ、妻、そして子どもたちの母として、生涯ルノワールを支え続けた。